

# 百匹のオオムラサキ

ときめきリーフノベル

文・高安義郎 絵・芝 章一



陽介は親や周囲に強いられ、好きでもない勉強をし、窮屈を感じながら大学を卒業すると中流企業に就職し五年ほどが過ぎた。社会人になればなつた今度は営業成績を競わされ、上司の顔色を伺いながら働くことに大きな疑問を感じた。人間はもつと自然の中でのびのびと生を謳歌するべきだ、とつくづく思うのだった。

そんなある日陽介は中学時代の仲間が飼育している国蝶のオオムラサキを見せて貰い、自分も飼つてみたくなつた。そこで食草のエノキを庭に移植しそれを大きな防虫網で囲つた。

「このビオトープでオオムラサキ百匹の楽園を作るぞ」そう意気込み百個ほどの卵を譲り受けた。

一週間ほどした七月の上旬、孵化した幼虫達は卵の殻を食べ、エノキの枝のあちこちに散らばつて行つた。更に

一週間ほどすると幼虫達は二齢になつた。オオムラサキ特有の小さな角が出、背中にも三対の突起が出た。見るとエノキには沢山のワタムシが真綿のよう

に群がり、木の根元からはアリが登つていた。これを見て陽介は、これこそ生を謳歌できる自然そのものだと思うと嬉しくなつた。

幼虫が三齢になつた頃アリの数が異様に増え、良く見ると一匹の幼虫にアリが群がつていた。アリが幼虫を食つていたのだ。陽介は思わずアリ共をつぶし、ついでにワタムシをはたき落として幼虫の数を数えた。百匹いるはずの幼虫がどう数えても四十匹ほどしかいない。孵化できなかつた者が一割とい

うに、五月のある日、箱の中の幼虫が目を覚ました。目覚めた幼虫を芽吹いたばかりのエノキに移すとその日から旺盛な食欲を見せ、一日に一ミリほどの速さで成長した。

数日で五齢幼虫になつた。木に登る力が弱い者や葉の無い所に上りつめ飢え死にした者など十匹ほどが死んだ。

幼虫がエメラルド色になり五センチほどに成長すると、陽介は誇らしさを感じた。

ある日一羽の鳥が網の隙間から入り込み幼虫をくわえて飛び去るのを見た。

急いで網を直し幼虫を数えると十五匹しかいない。全滅は免れたものの弱肉

強食の世界が恨めしく思えた。

ふと陽介は、自分の生活を厳しい物に感じ、自然の中でのんびり生きたい

とした満足感にも見えた。

ひとで悩まず相談しよう！青少年相談機関のご案内 ヤングテレホン番号0120-783-497  
[http://www.police.pref.chiba.jp/window/center\\_act/](http://www.police.pref.chiba.jp/window/center_act/) (千葉県警察少年センター)  
非行や虐待についての相談に応じています。受付は月～金曜日の午前9時～午後5時です。

十月になり一センチほどの四齢幼虫

た。

十二匹は順に蛹になり始めた。「蛹には気持ち悪がり近づかないが陽介には愛しささえ感じた。

やがて幼虫は黒ずみだし、十月の末には枯れ葉と同じ色になつてエノキの根元に降りはじめた。雨水に溺れたりアリに殺されたりせぬよう、枯れ葉にくるまつている幼虫を木箱に入れて越冬させることにした。

越冬期間は長かった。十月下旬から翌年の五月頃まで飲まず食わずで眠り続けたのだ。越冬中に十匹ほどが干か

らびて死んだ。

五月のある日、箱の中の幼虫が目を覚ました。目覚めた幼虫を芽吹いたばかりのエノキに移すとその日から旺盛な食欲を見せ、一日に一ミリほどの速さで成長した。

力が弱い者や葉の無い所に上りつめ飢え死にした者など十匹ほどが死んだ。

幼虫がエメラルド色になり五センチほどに成長すると、陽介は誇らしさを感じた。

ある日一羽の鳥が網の隙間から入り込み幼虫をくわえて飛び去るのを見た。

急いで網を直し幼虫を数えると十五匹しかいない。全滅は免れたものの弱肉

強食の世界が恨めしく思えた。

更に六齢になれたのは十二匹だけであつた。その頃エノキの葉はほとんどを青空に放つたのだつた。

陽介は網を開くとオオムラサキ四匹

になつた。角の先が赤く全身緑色で人には気持ち悪がり近づかないが陽介には愛しささえ感じた。

やがて幼虫は黒ずみだし、十月の末には枯れ葉と同じ色になつてエノキの根元に降りはじめた。雨水に溺れたりアリに殺されたりせぬよう、枯れ葉にくるまつている幼虫を木箱に入れて越冬させることにした。

越冬期間は長かった。十月下旬から

翌年の五月頃まで飲まず食わずで眠り

続けたのだ。越冬中に十匹ほどが干か

らびて死んだ。

五月のある日、箱の中の幼虫が目を

覚ました。目覚めた幼虫を芽吹いたばかりのエノキに移すとその日から旺盛な食欲を見せ、一日に一ミリほどの速さで成長した。

力が弱い者や葉の無い所に上りつめ飢え死にした者など十匹ほどが死んだ。

幼虫がエメラルド色になり五センチほどに成長すると、陽介は誇らしさを感じた。

ある日一羽の鳥が網の隙間から入り込み幼虫をくわえて飛び去るのを見た。

急いで網を直し幼虫を数えると十五匹しかいない。全滅は免れたものの弱肉

強食の世界が恨めしく思えた。

更に六齢になれたのは十二匹だけであつた。その頃エノキの葉はほとんどを青空に放つたのだつた。

陽介は網を開くとオオムラサキ四匹